令和５年度　学校経営計画・自己評価書

足立区立西新井中学校
校長　　齋藤　直樹

１　学校教育目標

１よく考え知性を磨く　【知性】
２学びあい品性を高める【品性】
３すすんで体力をつける【体力】

２　めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	生きる力を身につけ、自立し社会に貢献できる人材を育む学校 ・確かな学力の定着と体力・健康な体を育む学校 ・生徒が安心して楽しく学び、豊かな人間性を育む学校 ・保護者や地域と連携、協力した教育活動を推進し、保護者、地域の信頼に応える学校
○児童・生徒像	夢や目標に向かい、自分で考え判断し、表現、行動できる生徒 ・心豊かでたくましく、社会性を身に付けた生徒 ・意欲的に学習に取り組み、基礎学力を身に付けた生徒 ・自らのよさを発見し、主体的に行動できる生徒(自尊感情や自己肯定感を育む)
○教師像	人権感覚を身に付け、生徒、保護者、地域から信頼される教職員 ・生徒を第一に考え人権感覚、教育的愛情をもち、生徒や保護者に信頼される教職員 ・学習指導要領に則り、意欲的に授業改善に取り組み、わかる授業を実践できる教員 ・自己研鑽に努め、研修や課題解決に積極的に取り組む教職員

３　学校の現状及び前年度の成果と課題

＜学校の現状＞
本校は生徒数が 579 名で 17 学級からなる大規模な学校であり、教育活動全体においても活気のある学校になっている。また、ここ数年の学校正常化の取組が実を結び、年々、落ち着いた雰囲気の学校になっている。生徒たちはにこやかな表情で元気よく挨拶をして、授業や学校行事・生徒会活動・部活動等にも意欲的に取り組んでいる。そして、様々な活動場面での生徒の活躍がより目立つようになり、本校が目標とする「一人一人の生徒が輝き、笑顔あふれる学校」に、しだいに近付いてきている。一方で不登校生徒や特別に支援が必要な生徒の割合は増加しており、個々の課題に応じた対応が必要とされている。対人関係や SNS のトラブル、他校間トラブルも出てきて、早期解決・未然防止に努めると共に、生徒に寄り添い人権を尊重する対応が求められている。
＜前年度の成果と反省＞
【前年度の成果】
(1) 今年度も、生徒の生きる力の育成や不登校の未然防止、いじめ防止に向け、魅力ある学校づくりとして「一人一人の生徒が輝き、笑顔あふれる学校「地域に愛される学校」の実現を目指して、チーム西新井の体制で様々なことに取り組んだ。運動会、文化祭、修学旅行、魚沼自然教室の行事はコロナ感染予防対策をとりながら実施することができた。生徒アンケートの結果、学校行事、宿泊行事、部活動などに役割を果たして楽しむことができた生徒の割合は平均して９割だったこと。また、地域や保護者から応援されていると感じている生徒、楽しく生き生きと学校生活を送ることができている生徒

の割合も９割だったことからも、生徒一人ひとりが活躍できる場や機会を多く設定できたことで、自己肯定感を高めることができた。
(2)昨年度の区学力調査の全体の平均通過率は 63.3%で目標値の 65%を超えることができなかった。
(3)生徒の基礎学力の定着を図るため、朝学習で取り組んだ内容について基礎学力定着テスト(朝学習まとめテスト)を実施し、その結果から未定着箇所の補充を放課後に行った。
(4)教員の授業改善を進めるために、指導案を作成させて、管理職による授業観察を行い、授業後には必ず指導を行うことで、足立スタンダードや今次学習指導要領に則った授業を実践できるようになってきている。
(5) 全学年の生徒に家庭学習ノートに取り組ませ、毎日の家庭学習ノートの提出及び内容の充実を図ることで、家庭学習の習慣化を目指してきたが、日常的に家庭学習に取り組む生徒の割合は 70%にとどまった。引き続き家庭学習ノートの取組を継続すると共に、ＡＩドリルの活用や学習プリントの配布など家庭学習に取組やすくなるよう工夫、支援していき、家庭学習の習慣化を図っていく。
(6)より良い西新井中を目指して、生徒会活動の自発的・自治的活動が、より一層活発になってきている。今年度は、西中をより良い学校にするために「美化活動の活性化」を目指すことが生徒総会で議決された。年間を通して、生徒会役員と整美委員会を中心に点検活動や校内整備に取り組んでいる。
(7)部活動でも活躍した生徒が多数いた。吹奏楽部がマーチングコンテスト全国大会で２年連続金賞を受賞した。水泳部は関東大会リレーで優勝。ソフトテニス部、バスケットボール部、卓球部、陸上部は都大会出場を果たした。
【今年度の課題】
(1)区学力調査の全体の平均正答率と平均通過率は昨年度目標の 65%を下回ってしまった。特に数学が 62.7%、英語が 60.8%と低く、学年別にみても２，３年の数学と英語は 50%台の通過率であった。数学と英語の基礎学力の定着という点では不十分な点が多いことから、授業改善、放課後補充により定着を図っていく。
(2)学力向上のために、生徒が分かる授業を実践するとともに、学ぶ楽しさを感じさせる授業改善が必要である。今年度も教科指導専門員と連携し、日常の授業観察や研究授業、成果発表授業を通して ICT 機器の効果的な活用や振り返りの工夫などで授業改善を推進していく。
(3)１年生は年度当初に家庭学習のやり方指導を実施することで、家庭学習の習慣化をめざした。まだ特定の生徒が提出できない傾向も見られ、家庭学習の習慣を定着させるために、やり方や内容など放課後の時間を活用し個々に応じた指導を行い、家庭学習の定着を図っていく。学級、学年間による差もあり、引き続き、全校で家庭学習の定着の取組を進めていく。
(4)不登校対応に関してはランチルーム登校やチャレンジ学級等の関係機関と連携して改善を図っているが、昨年度も不登校生徒の割合は 13.1%で目標を下回れなかった。今年度も教育相談部会の活動やＳＣ・ＳＳＷ・関係諸機関との連携を更に強め、粘り強く対応していく。不登校の割合を下げられるよう、ランチルーム登校を現在の自習型に加え、カタリバと連携し学習支援型を新設し、より効果的な運営を進めていく。家庭連絡や家庭訪問、面談などを状況に応じて実施し、生徒、保護者とのつながりをもち、関係機関の協力も得て、進路の選択、決定ができる体制を継続していく。
(5)自己肯定感に関するアンケートの肯定的回答は９割近く、学年が上がるごとに意識は高まっているので、今年度も各種行事や日常生活の場で生徒が活躍できる場面を多く設定できるよう工夫していき、魅力ある学校づくりを実践する中で、生徒の自己肯定感、自尊感情を育んでいけるようにする。

４　重点的な取組事項

	内　　容	実施期間（年度）　R:令和				
		R3	R4	R5	R6	R7
1	学力向上アクションプラン　基礎的・基本的な学力の定着	○	○	○	○	○
2	小中連携の推進と授業改善	○	○	○	○	○

3	自善尊感情の醸成と不登校生徒への適切な対応	○	○	○	○	○

5　令和５年度の重点目標

重点的な取組事項－１	学力向上アクションプラン　基礎的・基本的な学力の定着

Ａ　今年度の成果目標	達成基準 （目標通過率）	実施結果 （通過率結果）	コメント・課題	達成度 ◎○△●
年度末の到達度確認テストの目標正答率と令和５度の区調査目標通過率を達成する。	・年度末の到達度確認テストの目標正答率→６５％以上 ・令和５年度の区調査の目標通過率→６５％以上			

Ｂ 目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 （誰が、何を、どのように）	達成確認 方法	達成目標 （＝数値） （いつ・何を・どの程度）	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	授業改善の推進	全校全教科	年間を通して	【指導体制】管理職、教科指導専門員、主幹教諭、主任教諭 【取組内容、目的】全教員の授業力向上のため、管理職と教科指導専門員の担当教科で授業観察と事後指導を行う。主幹・主任教諭で若手教員の授業観察を行う。生徒の授業評価を12月に実施し、教員の授業改善を推進させる。	分かる授業を実践し、生徒に学ぶ楽しさを感じさせることができたか。	12 月生徒授業評価で「授業内容は理解できた」の割合を90％以上にする。「足立スタンダードに基づいた授業を実践した」の割合を100％にする。	1 月実施生徒調査の「授業はわかる」の割合は 88.9％で、足立スタンダードに基づく授業関連項目の肯定的回答は　％だった。	次年度に向け、更に教員の授業改善を促進し、ＩＣＴ機器の有効活用により、生徒が学ぶ楽しさを感じて、分かる授業を実践させる。	○
2 継続	ＩＣＴ機器ＡＩドリルの有効活用	全校５教科	年間を通して	朝学習と補充学習で活用していく。 授業内での活用法についても、各教科で試行、検討する。	教科によるICT機器､AIドリルを効果的に活用できたか。	活用状況調査で80％以上｡朝学習定着テストや再テストで 70～80％得点する。	教科で偏りがあるが長期休業課題や朝学習で活用。９月と重点月間11月は活用率が 80％を超え活用頻度が上がった。	各教科で長期休業や家庭学習、朝学習や補充教室での効果的活用を推進する。他校の実践や事例を参考に、積極的に活用取に取り組ませる。	○

3継続	朝学習と連携した放課後補充	全校５科	年間を通して	【指導体制】学年教員 【取組の目的】基本的内容の問題演習に取り組み、基礎学力の定着を図る。 【使用教材】教科の自作プリントとAIドリル。内容は英語の基本文、英単語、計算、漢字等。採点は生徒本人または教員が行う。	毎週月曜に基礎学力定着テストを実施し70～80％以上できたか。コンテストを取り入れ生徒の学習意欲を高められたか。	毎週の基礎学力定着テストで８割以上の生徒が正答率70～80％以上を得点できるようにする。	数英を中心に実施。8割以上の生徒の正答率が目標に満たない単元もあった。コンテストでは８割近くが合格できた。強化月間はＡＩドリルを活用した朝学習を各教科で実施した。	次年度はＢ，Ｃ層を中心に基礎学力の向上と学習に取り組む姿勢を身に付けさせていく。Ｄ層への支援も継続し、長期休業等を活用し個別に指導にあたっていく。	△
4継続	家庭学習の定着	･全学年 ･全科	毎日	【指導体制】担任、副担任で分担し点検、内容の確認、返却。 【取組内容、ねらい、目的】家庭学習ノートを毎日提出し、家庭学習の定着を図る。朝学習や授業の復習に取り組むよう指導する。未提出の生徒は残して学習、提出させる。。 １年生は年度当初の１週間、放課後に家庭学習のやり方を「家庭学習のしおり」を活用しながら、指導する。	家庭学習点検表で提出状況を把握する。 家庭学習の取組内容に変化があったか。家庭学習ノートを効果的に活用できたか。家庭学習の習慣が身についたか。	全学年で家庭学習ノートの提出率 80%以上を達成目標とする。 内容の検証。12月の生徒アンケートで家庭学習ノートを効果的に活用できたという設問の肯定的評価を 80%以上にする。	家庭学習の習慣化を目指してきたが日常的に家庭学習に取り組む生徒の割合は７割で内容も漢字や英単語練習など提出することが目的になってしまい、生徒にとって学習習慣をつけ学習意欲を高めるものになっていない。	・提出状況にムラがあるものの概ね毎日提出できた。 ・内容の良いものは掲示や学年通信で紹介し他の生徒の参考とする。AI ドリルや課題プリントなど取組やすいもにし家庭学習の習慣化を図っていく。	△
5継続	学力定着度確認テストの実施	･1，２年 ･国語・数学・英語	２月土曜授業にて実施	【取組内容、ねらい、目的】3基礎学力がどの程度定着したか検証。正誤率等の分析して、授業や補充教室等の指導方法に活かせるようにする。	正答率で目標値を超えることができたか。	4 月の区学力調査の正答率をそれぞれの学年で＋5％以上にする。通過率 65%	２月上旬に実施予定		

重点的な取組事項－２	小中連携の推進と授業改善			
Ａ　今年度の成果目標	**達成基準**	**実施結果**	**コメント・課題**	**達成度**
・今次学習指導要領や足立スタンダードを基にした授業の実践 ・昨年度の区調査結果から３校共に書く力、表現力に課題があるため、書く力を含めた表現力を育む取組の実践 ・小学校２校と連携の充実と関係強化	・授業の実践は教職員の肯定的評価を 100% ・書く力・表現する力の項目の肯定的評価を 80%以上 ・小学校との連携充実は教職員の肯定的評価を 90%以上	・各校において研究授業を行い授業実践・研究協議ができた。 ・授業実践以外の連携、情報共有を行った。	分科会ごとの授業研究を行い、全体で共有することで他の取組を生かせるようにしていく、	

B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
今次学習指導要領や足立スタンダードを基にした授業の実践	「生徒の主体的・対話的で深い学び」や「ねらい」「振り返り」の実践ができているか。	・小中連携の研究授業での実践 ・管理職や教科指導専門員の授業観察時おける実践	各校において足立スタンダードの研究授業を行い研究協議ができた。	生徒の主体的・対話的な授業は展開されているが「課題設定」「振り返り」の工夫が必要。	○
書く力を含め表現する力を付けられる取組の実践	書く力、表現力を付けるための取組場面を多く設定できたか。 書く力・表現力が付いた肯定的評価が８割以上	年度当初に小中３校で連携し各教科、領域、行事等において、具体的な取組を決め、書く場面、表現する場面を多く設け、実践させる。	「書く力、表現力を育む」を共通テーマで３校それぞれの学校にて６月、９月、11 月に分科会ごとに研究授業を実施した。		
教科以外の生活指導や家庭学習等についての話し合いや研修がもてるようにする	教職員の肯定的評価を90%以上	授業参観後に分科会内で情報交換がもてるようにする。 「ICT 機器の活用」「家庭学習の定着」「サマースクール」等についての具体的な実践例の共有や研修の実施。	オンラインにより効率的に指導案検討できた。授業後は研究協議が中心で、情報交換はあまりできなかった。中１勉強合宿に小学校の先生に小学校単元の授業をしてもらい、効果を上げた。	配慮の必要な生徒の情報共有、家庭学習の習慣化などについても話し合う機会を設ける。 サマースクールでの相互交流を図る	○

重点的な取組事項－３	自尊感情の醸成と不登校生徒への適切な対応			
A　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
・教育活動全般を通して生徒の自尊感情を醸成する。 ・不登校生徒への適切な対応	・生徒の自尊感情に関するアンケートの肯定的評価を平均で85%以上にする。 ・不登校生徒を全体の 8%に減少させる。	・4 月の自尊感情に関する意識調査の肯定的評価は66.5%で１月の調査では互いを尊重し合い、自分の役割を果たし、楽しく生き生きと生活できたという割合は全体で87.7%だった。 ・不登校生徒の割合は１１月の調査では10.0%だった。	・生徒が自発的・自治的な活動ができるようになってきている。 ・不登校生徒の割合を減らす対応として関係機関と連携した対応が必要。	△

B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度

生徒の自己肯定感を高める	区調査や学校評価アンケートの自己肯定感に関する項目の肯定的回答の生徒の割合 80%以上。	・様々な教育活動を通して、自分はもちろん、相手も含めお互いに認め合い受け入れられるようにする。 ・年間２回自己評価アンケートを実施する。	４月の意識調査では「自分には良い所がある」の割合が 66.5%だった。１月の互いを尊重し合い、各種教育活動で役割を果たして、楽しく生き生きと生活できている生徒の割合が全体で 87.7%だった。	行事、委員会活動や部活動などを通して生徒の活躍の場は多く設けた結果、全体としては自己肯定感が高められた。	○
別室登校の効果的な取組	・ランチルーム登校によって、不登校生徒が登校できるようになったか。 ・教室復帰できたか。	・週５回、ランチルーム登校を実施する予定。 ・３か月を１クールとして、その時の状況を確認しながら、教室復帰を促す。	・週５回の別室登校の実施 ・定期的に状況を確認し、生徒。保護者、担任、担当教員、管理職で継続の有無や登校回数の増減などの確認を行った。 ・カタリバと連携した学習支援型を新設し、毎週木曜日に実施し、５名の生徒が活用している。	・別室登校を選択したが、午前中の登校が難しい生徒もおり、午後の開室を実施し、活用生徒も増え効果をお上げている。環境整備に課題があり、検討していく。	○
外部諸機関との連携の強化	・校内の教育相談部会メンバー全員が肯定的評価することができたか。	こども支援センターげんきと連携して、あすテップやチャレンジ学級、カタリバやキッズポート等との連携の強化を図れたか。	個々の生徒の状況に応じて、週１回の教育相談部会で、ＳＳＷ、ＳＣで相談して、家庭訪問など生徒、保護者への対応を行い、外部関係諸機関との連携を図り、つなげることができた。	・生徒と保護者の理解と連携を図ることが難しいケースが多く、関係機関にどのようにつなげていくかが課題。	○
ボランティア活動の推進	・ボランティア活動参加生徒延べ 200 人以上 ・地域に貢献したい、積極的にボランティアに参加できたの肯定的割合 80%以上	ボランティア活動の意義を様々なところで取り上げていけるようにする。校内外のボランティア活動に積極的に参加を推奨する。	吹奏楽部の地域イベント参加や開かれた学校づくり協議会の花いいパイ運動や美化活動にボランティア生徒が参加し、延べ 310 名参加できた。	地域のイベントや開かれや PTA の活動も復活しており次年度以降もボランティア活動への参加を推進していく。	○

６　まとめ

（１） 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

重点的な取組事項－１　基礎的・基本的な学力の定着

① 令和５年度区学力調査では３科平均の通過率が 58.7%で、目標としていた通過率 65%以上を大幅に下回り達成することができなかった。特に数学と英語の通過率は 55～56%で半数近くが目標値に達成しなかった。

②朝学習と連動した基礎学力定着テストの取組、放課後補充教室を実施し、基礎学力の定着を図った。特に数学科では、個に応じたつまずきの解消にＡＩドリルを活用し繰り返し問題演習をすることで学力の定着を図ることができた。通所型の夏季勉強合宿では数学科を中心に全校体制で取り組み小学校の教員にも協力してもらい、40%未満の生徒の学力の定着を図ることができた。行事や定期考査で補充等継続した指導が十分できなかったこともあり、３か月の検証テストでは定着度が下がってしまった。

③家庭学習のやり方指導を１学年生徒対象として行い家庭学習の習慣化をめざした。内容の充実は図るため、良い内容の家庭学習を紹介したことで、振り返りやまとめなど充実した内容の家庭学習が増えてきたまたＡＩドリルの活用も取り入れた。しかし、日常的に家庭学習に取り組む生徒の割合は75%にとどまった。内容も英単語や漢字の練習などに留まり、提出することが目的になり、家庭学習の習慣化、効果的な取組とはならなかった。
④今年度２回の授業観察期間を設定し、教員に指導略案を提出させ、管理職が全ての授業を観察した。そして、事後には足立スタンダードや新学習指導要領の観点から管理職が指導・助言を行った。２回の授業観察のうち１回はICT機器を効果的に活用した授業展開を指示し実施された。板書や発問の工夫、ＩＣＴ機器の効果的な活用、振り返りの工夫など指導と評価の一体化を意識した授業展開に取り組み、「授業がわかる」は全体の？%で目標を達成できた。足立スタンダードに基づく授業の項目については「できている」が？%で目標達成できなかった。中でも、グループ活動や発表活動の項目の割合が低く、今年度も課題として取り組んできたが、継続して改善を図る必要がある。
⑤各教科でＩＣＴ機器を積極的に活用した授業改善に取り組んできたが、教科、教員により差があった。教科による生徒一人一台の活用についても課題が残った。

【次年度に向けた課題及び解決の方向性】

① 令和５年度の区学力調査における３教科平均の通過率は 58.7%で目標を下回ってしまった。特に数学と英語の通過率は 55～56%で半数近くが目標値に達成しなかった。前年度の学習内容の基礎的な学力の定着が十分つけられていない。来年度は？も引き続き、朝学習・基礎学力向上テスト・放課後補習教室・家庭学習の関連性を深める中で生徒の学習意欲の向上を図る。また、教員には授業改善にしっかり取り組ませ、ＩＣＴ機器を有効活用し、生徒が学ぶ楽しさを感じて、分かる授業を実践させる。
②次年度は数学と英語に重点を置き、？朝学習と連動した放課後補充を実施していく。時期を決めて実施した朝読書週間も継続していきたい。
③家庭学習ノートの提出率は全学年で 80%を超えることができなかった。学年が進むにつれ提出率が下がる傾向や学級により提出率に差が出てきている。学校全体で家庭学習に取り組む意義を伝え、学習方法や取組内容について個別に指導することや学年全体でやませる方法を考えるようにする。
④学力の定着には、何よりも教員が分かる授業を実践し、学ぶ楽しさを感じさせられるような課題設定や学習活動の工夫をすることが大切である。今年度もペアやグループの活動、話し合いや発表活動も感染予防対策を行い、各教科の授業で実施してきたので、次年度も引き続き、改訂学習指導要領や足立スタンダードを意識した「主体的、対話的、深い学び」の授業改善に取り組ませていく。ICT 機器の活用など効果的な指導法や評価についても検討し、授業改善を図っていく。
⑤教科部会の活性化を図り、各教科で指導と評価の一体化を目指し、特に第三観点について、学校全体として評価、評価材料等の見直しを図る。
⑥ICT 機器の活用については、教科、教員間で差があるので、校内での情報共有や外部の研修等で、全教員で効果的な活用ができるよう取り組んでいく。各教科で一人一台のタブレットの効果的な活用については他校の事例や研修を通して促進していく必要がある。

重点的な取組事項－２　小中連携の推進と授業改善

【今年度の成果】

①小中連携の研修は、年間３回の研究授業、研究協議を実施できた。小中９年間を見通した学びの継続性を前進させ、授業だけでなく授業規律や生活指導、家庭学習にもつなげていく。

【次年度に向けた課題及び解決の方向性】

①小中連携研修は年度途中で計画の変更や計画の提案が開催間際になることが多かったので、日常的なつながりや校長間、担当者間の連携を密に行い、スムーズな実施と研修内容の深化に。また日常的に互いの小中学校間の授業や行事の見学や児童生徒の交流ができれば、小中連携の活動をより深化させていくことができるはずである。次年度は、研究授業以外にも小中学校の交流活動を年間で数回実施できるように努めたい。

重点的な取組事項－３　自尊感情の醸成と不登校生徒への適切な対応

【今年度の成果】

② 　自尊感情の醸成についての取組は日常の学校生活だけでなく様々な体験活動の工夫など、それぞれの教員が様々な取組を考え、実践できるようになってきている。生徒会を中心とした様々な活動で各種委員会を活性化させ、生徒が自発的・自治的な活動ができるようになってきた。今年度は学習に取り組む姿勢の重点を置いて、生徒会や学習委員会を中心に活動を行い、授業態度や学習意欲の向上に努めた。

③ 不登校の未然防止のために、目指す学校像「生徒一人一人が輝き、笑顔あふれる学校」の実現に努め、教職員が一丸となって様々なアイデアを出し合い、生徒の活躍の場を作り出した。運動会、文化祭、宿泊行事、合唱コンクールなどの行事ではコロナ以前の形で実施できた。毎週火曜の教育相談部会において、不登校生徒の情報交換や対応について丁寧に話し合い、関係諸機関へつなげるなど適切な対応をとることができた。ICT 機器の活用やカタリバとの連携で、学級に登校できない生徒への対応策として、不登校生徒の別室登校の体制の再構築を検討している。

③ 　ＳＣやＳＳＷ・関係諸機関との連携強化を図ることができた。特に、今年度はキッズポートやカタリバ・SODA 等との連携を強めることができた。また、状況に応じてケース会議を開き、より効果的な対応をとることができた。生徒だけでなく、保護者へのカウンセリングを充実させるとともに、家庭の状況によっては学校からの適切な支援を行うことができた。

④ 　開かれた学校づくり協議会主催の花いっぱい活動や美化活動に延べ 160 名のボランティアが参加できた。地域のイベントも少しずつ増え、吹奏楽部はイベントへの参加要請があり、演奏を披露する機会をもてた。

【次年度に向けた課題及び解決の方向性】

①自尊感情をより効果的に育むためには、教員主導の取組だけでなく、生徒会の活動を中心とした取組が必要不可欠であると思われる。生徒会の自発的・自治的な活動が増えてきているが、まだ生徒主体の取組は十分とは言えない。今後は、今まで以上に生徒会活動の活性化に力を注いでいく。

②不登校対応に関してはできる限りのことはやってきたが、以前から不登校生徒の人数が増加している。次年度も教育相談部会の活動やＳＣ・ＳＳＷ・関係諸機関との連携を更に強め、粘り強く対応していくとともに、別室登校の取組を効果的に活用し、登校できる生徒を増やしていけるようにする。

③ＳＣやＳＳＷと連携して、関係機関へスムーズにつなげられたケースもあったが、生徒と保護者の理解と連携を図ることが難しい家庭もあり、手続きや事前段階まで至らないケースも多かった。ＳＣやＳＳＷ、学校で家庭の理解が得られるよう粘い強く対応し、関係機関につなげていく。

（２）保護者や地域へのメッセージ

これから先の社会では、これまで私たち大人が経験したことがないことや想像もつかないことが待ち受けています。そんな将来を生きていく生徒たちには、互いを理解し様々な人とつながり協力して物事を成し遂げること、身につけた知識や技能を活用して未知なる課題を解決していくことが求められています。そこで、「夢や希望に向かって挑戦し、失敗しても諦めずに進んでいける生徒」、「自分で考え、判断し行動できる生徒」の育成を目指し、社会人として必要な自立の力を身につけられるよう教育活動に取り組んでまいります。何よりも、一人一人の生徒にしっかりと学力が付くように、楽しく、わかる授業作り、授業改善につとめ、チームワークとフットワークの良い教員集団で、授業はもちろん、部活動や行事など様々な場面で多くの生徒が活躍できる場を設け、生徒一人一人が輝き、笑顔あふれる、安心安全な学校づくりを進めてまいります。学校全体、学年、学級を通して集団としての力を高めることはもちろんですが、一人一人の異なる興味や関心、見方や考え方を捉え、個々の生徒の心に寄り添った温かな指導を大切にして、その可能性を伸ばしていくことで生徒の自尊感情を醸成していきたいと考えています。保護者の皆様にも、宿題など毎日の家庭学習の取り組み、挨拶など、お子様への声かけにご協力お願いいたします。

（３）その他（学校教育活動全般について）

本校では生徒一人一人の「たくましく生きる力」を培うために、次の４つのことを中心にして様々な特色ある教育活動を行っています。

・一人ひとりの生徒に寄り添った、粘り強い指導を行っています。若手教員、中堅教員、ベテラン教員がチームワークとフットワーク良く教育活動に取り組み、今次学習指導要領に沿った授業改善に努め、西新井第一小学校、西新井第二小学校と連携した足立スタンダード型の授業を実践しています。生徒の確かな学力の定着を目指して、生徒が分かる授業、学ぶ楽しさを実感できる授業、主体的・対話的で深い学びの授業を実践するために、ICT 機器の効果的な活用や指導法の工夫などの授業改善に取り組んでいます。また、生徒の基礎的・基本的な学力を定着させるために、朝学習・放

課後補充教室・放課後自習教室・家庭学習ノートの効果的な活用等に取り組んでいます。
・学年が進行するほど不登校生徒が増加傾向にあり、未然防止のため休み始めの初期段階で原因を究明し対応しています。担任やスクールカウンセラー等による面談、家庭訪問を行い、関係機関とも連携を図っています。ランチルーム登校での個別学習対応から教室復帰をめざしていますが、学校復帰は厳しい生徒が多い中、卒業後については生徒、家庭と連携し様々な選択肢の進路を紹介し指導にあたっています。
・学校行事や宿泊行事での体験活動、生徒会活動や部活動など様々場面で生徒一人ひとりが活躍できる場をできるだけ多く設定することで、望ましい集団活動を通して生徒の協調性や思いやり・感動する心など豊かな人間性を育んでいます。地域との関わりをもたせるボランティア活動の推進などさらなる充実を図り、生徒の自己有用感や自尊感情の醸成に努めていきます。
・将来を見通した人生設計ができるようキャリア教育を推進し、将来への夢をもち、自分の目標に向かって努力、挑戦していく過程で、自分の良さや能力、特性や適性を発見し、進路選択、進路実現につなげていけるようにしています。